願いよ…

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願いよ…

【Ｎコード】
Ｎ１１６２ＢＡ

【作者名】
鈴蘭

【あらすじ】
―蘭ちゃんのせい…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんさえ…来なければ…―
四人の転校生が来てから始まった悪夢…
―愛してしまった…彼女を…―
―快斗をかえして！返してよぉぉ！―
―もう、遅いんだよ、青子。諦めろ…―
―返してよぉぉ！！―
青子と快斗のすれ違い。蘭を心から愛する快斗。快斗を心から愛する青子。

かなうことのない恋をする2人。
片思いする青子と快斗。
蘭は新一を新一は蘭を。両想いの蘭と新一。何もしていない蘭に青子が…
!?
「お前とは…単なる幼馴染だぜ?」
「私は好きなの…!快斗…大好き…!」
「青子ちゃん…ゴメンナサイ・・・」
「蘭…愛してるよ…」
「新一…私もだよ?」
すれ違う関係。どうすることもできない四人。何が原因なのか、何が悪いのか…それすら分からなくなる青子。はたして四人の運命は…!?

悪夢の始まり

「はじめまして、毛利蘭と…」
「工藤新一と…」
「宮野志保…」
「…と鈴木園子です！！」
ここ、江古田高校２－Ｂの教室になんと四人の転校生が来たのであった。
なぜ、四人もの転校生がきたのかというと、数日前のことであった。

「先生、私たちってどこの高校行くんですか？」
「あぁ、学校見学の…確か、江古田高校２－Ｂ。一年間いるんだからな？」
「一年間もいるんですか！？」
「そうだ、おまえたち四人は仲がいいから特別に同じ高校にしてやった。まぁ、ほかのやつらよりはいい高校だから、ついていけるかが心配なだけだ。」
「大丈夫よ、こっちには工藤君がいるもの。」
「そうだな…」
というわけで…
四人が江古田高校に一年間の見学者としてきたということだった。

そのことを、江古田高校の２－Ｂの先生がクラスメートに細かいところまで説明した。

「じゃぁ、自己紹介…まぁ、趣味、入っていた部活動、得意なことを…毛利蘭さんから…」

先生が言うと、蘭は続けた。

「えっと…私の趣味は、家事、掃除で、入っていた部活は空手部です。一応主将（キャプテン）でした。」

蘭の言葉に男子全員が意外そうに「えええええ！？」といった。しかも、あんな細い手足。そして、趣味が家事と掃除。いかにも家庭的である。

「それと…得意なことも空手です。」

男子も女子も驚く一言。

「えっと、俺は…趣味は読書（推理物）、部活はサッカー。得意なことは推理、以上」

女子は一斉に「キャーッ」と叫ぶ。

まぁ、仕方ない。あの、高校生探偵工藤新一なのだから。

「私は薬を開発する（実験）、部活は科学部、得意なことは工藤君を実験台にすること。」

最後の言葉に皆、不審に思ったが別に気にしていない…。

「私は、新一君と蘭をからかうことが趣味で、部活はテニス部！得意なことも２人をからかうこと！」

女子も男子も園子の言葉に意味不明だったが、特にまた気にしていなかった。

先生は一度咳払いし、四人が言った部活は江古田高校にすべてｗるということを説明し、四人の席を指定した。

新一は隣なし。

園子は後ろから二番目の席。

志保は園子の右ななめ前。

そして蘭は…

あの、世界的マジシャンの息子、黒羽快斗の隣の席となった。

（わ…ラッキー！）

快斗はそう思ったとたん、蘭は視線を感じた。

その視線の先には…

蘭そっくりの少女がいたのであった。

悪夢の始まり（後書き）

感想待ってます！

挑戦状

休み時間になると、新一と蘭と志保と園子は一斉に一つにかたまった。
「ねぇ、私たちどんなことを観察すればいいわけ？」
「さぁ…」
「まぁ、一応クラスメートの団結力とか？」
「そんなところでいいんじゃない？」
四人の意見が決まったところに快斗が蘭の目の前にやってきた。
「ねぇねぇ、みんなは仲いいの？」
「うん！そうよ。一応、こっちの大馬鹿推理の介と園子は私の幼馴染。志保は転校してきたの。それで今では親友って感じよ？」
一通り言うと快斗は「ふぅん…」といいながら新一をじろじろと見始めた。
「な、なんだよ…」
「いや、男一人で…」
「あぁ、園子が女って見えねーからな。」
「どういう意味よ、新一君！じゃぁ、空手抜群の蘭はぁ？」
「蘭はねぇ…う～ん、手ごわい女。」
「どう意味かな？新一。」
ものすごい勢いで睨む蘭に新一は冷や汗をたらしながらすみませんと謝った。
蘭はクスッと無邪気に笑って「よろしい」といった。
そんな無邪気なところも新一と快斗にはかわいらしいと思った。
「そうだ、俺は黒羽快斗。一応…」
ポンッと音を立てながら手から薔薇を出し、蘭に差し出す。
「マジックが得意。よろしくな！」
「わぁ、すごい！」
「へぇ～、すごいじゃん！」

「やるわね。」
女子たちは歓声をあげるが、新一だけがつまらなそうに快斗を見る。

いわゆる、快斗に嫉妬。

「ちょっと、快斗、あんまり持てるからってねぇ…」

そこには、蘭そっくりな少女が立っていた。

「ラ、蘭？」
園子が言う。
しかし、どこか違う。
「いやちげえよ」
「誰？」
「中森青子っていうの。快斗の幼馴染。」
「へぇ～！」
蘭は興味ありげな顔をして聞く。
「だれかににてるね！」
青子を見て言う蘭。

それにズケッと転ぶ新一と志保と園子と快斗。
２人は自分にそっくりと思っていなかった。

しかし、これは青子の挑戦状。

青子と蘭はいったいどういう関係になっていくのか…

それが、これから始まる悪夢だった…

挑戦状（後書き）

今回短かったんですが…
じつは、前回の小説で主将のことを私はキャプテンと言っていました。
じつは、主将のことをキャプテンともいうことがあるんです。
私、空手習ってるんでいろいろと知ってるんです。また、変なところがあったら教えてください。感想待ってます！

止めることのできない恋

（今日も快斗、顔が赤くなってた…）
青子はそう思いながら、1人下校していた。後ろのほうには新一と蘭と園子と志保とそして快斗がいるのだった。
もちろん、快斗は蘭の隣にいた。蘭は一応新一の隣だったが、新一が快斗に嫉妬しまくっていたことは言うまでもない。
いつもは幼馴染の快斗と帰っていた登下校のこの道。
たまに道草食って遊んで毎日が楽しかった。

しかし、四人の転校生が来てから快斗は青子とではなく、青子にそっくりの蘭を中心に帰るようになった。
青子は教室の中でも親友の桃井恵子と小泉紅子としか話さなくなった。というより、快斗が話しかけてこないのであった。

（蘭ちゃんにいつもべったり…）
そう、蘭が快斗の目の前に現れてからだった。
こんなにも変わってしまった日常の原因は。
（蘭ちゃんの…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんさえ…来なければ…）
悔しい思いをする青子。
それを知らない快斗と蘭。そして、ほか三人。

「なぁ、蘭、今日のご飯なんだ？」

（え？）

青子は後ろから聞こえてきた声に耳を傾けた。

「あぁ、ハンバーグよ。」

（なんだ…工藤君か…そういえば…工藤君と快斗って…そっくり。）

今頃気づいた青子。
しかし、この際どうでもよかった。
たとえそっくりでも、青子は快斗しか愛することはできない。
だからこそ、この恋はあきらめたくないのである。

（快斗が…失恋だったらいいのに…そしたら…青子のほうにも希望はあるよね？蘭ちゃんさえいなくなれば、快斗だって諦めるよね？）

そう考えた時だった。

〈蘭ちゃんさえいなくなれば〉

そう思った時、青子は最悪なことを計画してしまったのであった。

蘭がいなくなる計画を……

止めることのできない恋（後書き）

わぁ～、青子ちゃんが悪人にぃぃ！？
誤字脱字、目だったらゴメンナサイ・・・！

計画実行

私の名前は中森青子！
江古田高校２－Ｂ、元気な明るい子です。
でも、今は明るくも元気でもない。
最低な、どん底に落ちている青子です。

そう、青子は警部の娘ながら最悪なことを計画しようとしているのです。

だって、悪いのは蘭ちゃんだもん。
蘭ちゃんさえ江古田高校（この学校）に来なければ、青子はこんなこと計画しなかったもの。

だから、悪魔を追っ払うの。
青子が正義の味方になるの。

青子が頑張らなくては快斗が悪魔に飲み込まれてしまうもの。
快斗のためにも、青子のためにも頑張らなくちゃいけない。

警部の娘なのに？
最低？
それが何？
青子は正義のためにやってるのに…みんなどうかしてる。
青子、つかまらないもん。
お父さんが警部だし。
青子は正しいことやってるもの。

「青子ちゃん！」
そらきた。
勝手にやってくるうるさい女。
むかつく女。
快斗を奪った女。
「何？あ、ちょうどいいや。ちょっときて！」
青子は無理矢理彼女を屋上へ連れていく。

屋上へ着くと涼しい風が青子たちを見守るように吹いている。

さぁ、ラストチャンス。
今からいう質問に青子が思った通りにこたえてくれれば何もしない。
違っていたら、その場で…

屋上から突き落とす。

「蘭ちゃん、今からいう質問なんだけど…」
「質問？」
「そう、質問！」
「なんの？」
「いいから。じゃぁ、蘭ちゃんに好きな人はいますか？」
「え…」
いるの？いないの？
「い、いるかな…」

あ、そう…
ったく、
役立たず。
「その人はあなたの近くにいますか？」
「うん…いるよ…」
へぇ…いるんだ…
快斗なんでしょ？
「その人は…誰ですか？」

素直に言っていいのよ？

ただし、回答によっては

あなたの命は

ないわよ？

「私の好きな人は…

新一…

工藤新一だよ？」

え…！？

工藤…新一…？

高校生探偵の…快斗にそっくりな人。

その人が好きなんだ…

なんだ…なんだ…

そうだったの…なら…青子は蘭ちゃんの恋を応援すればいいんだ。
そして、工藤君と蘭ちゃんが付き合ったのを快斗が知る。
諦めて、青子に振り向いてくれる…！

いい！それいい！

「ねぇ、青子ちゃん、何のために質問？」
「ううん、青子も好きな人がいるの！そのことで蘭ちゃんも好きになってないかなぁ～！って！」
「あ、そうだったんだ！で？青子ちゃんは誰が好きなの？」
「快斗だよ！小さいころか大好きなんだ！」
「へぇ～私も。私も新一が小さいころから好き。いつも守ってくれて…新一は私のことどう思ってるのか分からないけどね…」
哀しい顔をする蘭ちゃん。
蘭ちゃんでもこんな顔をするんだ。
確かにそうだ。
蘭ちゃんって気の強そうな感じじゃない。
空手をやってるって言ってたけど、すごく優しそう。
だからこんなに悲しい顔をするんだ…
素直だから…

「蘭ちゃん！青子、蘭ちゃんの恋応援する！」
「本当…？」
「うん！だから、蘭ちゃんも青子の恋応援して！」
「うん！約束しよう！」
青子、さっきまで殺気が漂っていたのに今は蘭ちゃんの友達になっちゃったし…
なにやってんだか、青子ったら。
でも、聞いてよかった。
あとから後悔するなんていやだもんね。
でも…やっぱり蘭ちゃんへの違和感は変わらないんだ。
なんか、このままじゃいけない。
もっともっと…

深い違和感がある…

蘭ちゃんと仲良くなったらいけないような・・・

悪夢が待っているような…

私はその日、家に帰って夜になってベッドに入って寝てしまったら
変な夢を見た。

すごくいやな夢…
快斗が…快斗じゃない・・

―青子とは単なる幼馴染だよ―
―青子？あんな奴好きじゃねーよ―
―蘭ちゃん…おれ、蘭ちゃんのこと愛してる…―
―付き合ってくれねーか？―
―なんで？なんで工藤なんだよ！俺は…こんなにも蘭ちゃんを愛してるのに…―
―蘭ちゃん、俺はあきらめないよ？―

―蘭ちゃんと工藤が付き合った？―
―工藤が消えればいいんだな？―

快斗しか出てこない夢。
嬉しいはずなのに、内容は最低だった。

まるで…これからの出来事を予知しているかのように…

計画実行（後書き）

感想お待ちしています！

夢が現実になる始まり

変な夢だった。

青子は朝起きると、夢で見た、快斗が快斗じゃない夢を思い出していた。

青子を幼馴染としか見てなくて、苦しいほど蘭ちゃんを愛していた快斗。

目が合うことのない快斗。
夢の中でもそうなんだ…

現実でもそう。
快斗は目を合わせてくれない。
いや、目はあってるんだと思う。
でも、その目は蘭ちゃんへと向かっている。
青子を蘭ちゃんだと勘違いしているような眼で見ている。

でも、すぐにわかってしまうのだ…
だから、すぐに目をそらし、蘭ちゃんのほうへと向かっていく。

どうして…？

幼馴染って本当に思ってる？

本当は、単なるクラスメートって思ってるんじゃないの？

どうしてよ…

蘭ちゃんが来て…蘭ちゃんに一目ぼれして…

そうして、青子を見なくなった。

青子の存在は、快斗のなかにいるの？

快斗…青子はこんなにも苦しいほど快斗のことが好きなのに…

どうして…どうしてわかってくれないの…？

そんなことを考えている間に青子はいつの間にか学校についていた。

朝ご飯食べたっけ？

お父さんにご飯作ったっけ？

お父さんに「行ってきます」って言ったっけ？

疑問符が青子の頭に浮かびあがる。

まぁ、いいや。

ちょっとぐらい…ちょっとぐらいいいじゃない。

青子はそう思って、蘭ちゃんのほうを無意識に見てしまった。

快斗と笑顔で話す蘭ちゃん。でも、彼女は好きではないと言っている。

信じてもいいんだよね？

青子は、蘭ちゃんを信じてる。

だから…恨みはしない…よね？

なんだか不安が青子の中で渦を巻いている。
なんだろう…
これから嫌なことがあるような気がして…

そう思ってる時だった。

いきなり、蘭ちゃんがバタッと音を立てて倒れたのだった。

無理…してたんだ…！

真っ青な顔をして倒れる蘭ちゃん。
女子が悲鳴を上げる。
快斗は蘭ちゃんを抱き上げようとした時、素早く工藤君が蘭ちゃんを抱き上げた。
お姫様だっこされてる蘭ちゃん…うらやましい…と言いたいところだけど、そんなこと、考える暇なんてない。
工藤君も青い顔をして蘭ちゃんを急いで保健室へ抱き上げながらい

った。

蘭ちゃん…大丈夫かな…！

青子は蘭ちゃんの親友の園子ちゃんと宮野さんを連れて保健室へ向かった。

蘭ちゃんはさっきよりは顔が赤くなってすやすやと寝ていた。

きれいな顔…

かわいらしい顔…

「新一君！蘭は？！」
あせる園子ちゃん。
青子もその答えが聞きたい。
「あぁ、先生によると睡眠不足だとよ。」
「変ね、蘭が睡眠不足なんて…」
「ゲームでもしてたんじゃないの？」
私の発言に三人は「ハァ？」とでも言いたそうな顔をした。
え？ち、ちがうの？
「何言ってるのよ。蘭はゲームなんかしないわ。蘭がやるといえば家事と掃除、そして工藤君のお世話。あと…空手ね。」
あ、そうなんだ…
そういえば、自己紹介の時いってったっけ。
そんな話しをしているうちに快斗が青子たちの目の前に現れた。
三人がキッと睨むように快斗を見る。
まるで、「蘭が倒れたのはおまえのせいだ」とでもいうような顔。
青子は何も言えず、ただ黙っているだけだった。
「蘭ちゃんは！？」
「寝てるわよ、見てわからない？」
宮野さんの嫌みたっぷりないい方に快斗が宮野さんを睨む。
にらみ合う工藤君と快斗、園子ちゃんと快斗、宮野さんと快斗。
青子はその場に居られなかった。
いることが許されるのだろうか？
青子は…

この関係に入られることができるだろうか…？

そうやって睨みあっているうちに蘭ちゃんが瞳を見せた。

きれいな澄んだ瞳は私たちを順に見ていく。

「あ…私…」

「蘭！」

一番最初に声を上げたのは工藤君だった。

嬉しそうな甲高い声。

「新一…園子…志保…青子ちゃん…黒羽君…」

順々にいっていく蘭ちゃんは哀しげな表情だった。

「ごめんなさい…私…何してたんだろ…？」

「蘭はさっき倒れたんだよ…」

工藤君がベッドに寝ている蘭ちゃんに優しい声で言う。

「そっか…ごめんね、迷惑かけちゃって…」

心からそういっているような顔で私たちに言う。

そんな表情もかわいらしかった。

「蘭、何で睡眠不足だったのか、心当たりある？」

宮野さんが単刀直入に言った。

青子は同感した。

早く聞きたい。

蘭ちゃんに何があったんだろう？

「空手の東日本大会が近かったの。だから、夜まで練習してたの。

絶対優勝したかったから…」

熱心な蘭ちゃん…

きっとお父さんも知っているんだろう、なんてよい娘なんだろうっ

てね。

青子、蘭ちゃんのこと尊敬しちゃった。

「でも、蘭ちゃん！無理しちゃったら余計迷惑だよ！次からはちゃんといってよ？」

「まぁ、いう人は、新一君にしてよ？蘭を守れるのは騎士（ナイト）である新一君だけなんだから！」

「ちょっと、俺がいるじゃんか！」

快斗の声が保健室に響く。

青子も含めて五人が一斉に快斗を見る。

「え…何？」

「あんたに蘭は守れないわ！」

「蘭が守れるのはただ一人、工藤君だけよ？」

女子たちの攻撃が快斗に襲いかかる。

青子は

止めてあげたくない…

そう、蘭ちゃんのことをあきらめてほしい…

そう思い続けただけであった…

夢が現実になる始まり（後書き）

蘭ちゃんって本当に可愛いですねぇ～！
というわけで、感想待ってます！

男の対立

「えー、みんな知っていると思うが、一か月後に学園祭がある。そこで、うちのクラスでは劇をやることになった。それを知っていた鈴木がシナリオを書いてきてくれたんだ。まぁ、完全なラブロマンスだがな…」
先生の言葉に園子は「ニヘヘ」と、新一と蘭は「またぁ…？」と、志保は「フッ」と笑っただけだった。
クラスメートは嫌がっている奴もいれば、まぁいいんじゃないか、と言っている奴がいた。
そんなクラスを先生が二回ほど手を叩くと、生徒たちはハッとして先生のほうを向く。
「いいか？いまから役を決める。自分のやりたいものに手を上げるんだ。じゃぁ、委員長、副委員長、よろしく。」
先生がそう言うなり、自分の机へと戻ってしまった。
委員長らがシナリオを見ながら黒板に登場人物を書いていく。
と、シナリオを見ていると、いきなり、副委員長の顔が真っ赤になった。
「どうかしたか、副委員長！」
「…キ、キスだって…」
「えええええええええええ！？」
副委員長とともに先生も含めて生徒（新一、蘭、志保を除き）は一斉に園子を見た。
「え…ふつうでしょ？ラブロマンスよ？これくらいいいじゃない。」と平然に言う園子。
帝丹高校に者は園子の描くシナリオには必ず「キス」を入れることを知っている。
なので、いまさら驚いたって仕方ない。
「あ、でも、本当にしないよ？」

園子はにやにやしながら新一と蘭を交互に見る。
そんな顔には「あんたたちが主役をやりなさい」とでもいうようだった。

「そ、それで、皆さんはどの役をやりたいですか？」
委員長が改めていう。
みんな、主役以外のものに手を上げていく。

そして、主役がまだ決まらずにみんな黙っている時だった。

二つの手が上がる。

「はいっ！先生！私は蘭と新一君を提案します！！」

「「はぁ！？」」

「あんたたち、まだ約決まってなかったよね…？」
にやっと笑う園子。

うっと言葉を失う新一と蘭。
「先生！俺の手も上がってるぜ？！」
「な、なんだね？」
「俺が主人公やるから、ヒロインを…

蘭ちゃんに！」

「「「えええええええ！？？！」」」

園子、新一、蘭が同時に言う。

快斗はキョトンとして「へ？」といった。
「あんたねぇ！もう主人公は決まったのよ！？
先生、蘭と新一君で決定です！！！文句ある人、手をあげて！」
にらむ園子に誰も手を上げない。
ということで…

主役二人は新一と蘭に決まってしまった。

「ちぇ・・・俺と蘭ちゃんのほうがよかったのに…隣の席なんだしさぁ・・・」

快斗はつまらなそうにそっぽを向いた。

授業が始まると、快斗が蘭に話しかけ始める。
「ねぇねぇ蘭ちゃん、明日の家庭科でクッキー焼くんだよね？」
「えぇ、そうだったような…」
「なら俺にちょうだい！」

「でも・・・先客がいるの…」
「だれ？」
目を光らせる快斗。
まるで猫。
「新一よ。」
「ふぅ～ん・・・蘭ちゃんは工藤が好きなの？」
「…」
蘭は黙ってしまった。
快斗はそれを見て何かあったのかと思った。

「なぁ、今日カフェにでも行こうぜ？」
「え・・・？」
「いいからさ！ね？」
「う、うん…」
蘭は仕方なく承知してしまい、放課後、快斗と蘭はカフェについた。

「かわいいところね…！」
蘭は店の中をきょろきょろとみて席に着く。
「ねぇねぇ、それで？工藤と何かあったの？」
「ううん・・・ただね、私の片思い。」

「え？片思い！？」

快斗は蘭の言葉に驚きを隠せず大声を出してしまった。

「ちょっと、声がでかいよ…！」

顔を赤くしながら言う蘭。そんな顔でもかわいいと思ってしまう快斗。

「新一…なんかさ、最近私に冷たいの。ご飯作りに行っても目を合わせてくれない…」

蘭は悲しそうに話を続ける。

「私がいなくなればいいのかなぁ…って。しかも、主役になっちゃうし。」

「蘭ちゃん…」

二人がそんな会話をしている、二個後ろの席ではなんと、園子と志保と新一が聞いていた。

新一は蘭の言葉に顔を赤くしたり、悲しそうな顔をしたりしていた。

「それで？新一君。あんたたちは両思いってことになるけど…」

「…うっせ・・・」

「あなた、蘭のことが好きなら蘭は優しくしなくちゃ…」

園子と志保の攻撃に新一は顔を赤くしながらそっぽを向く。

「なんで冷たいのか、予想してみると…原因は黒羽君ね…」

「そうねぇ…彼をどうにかしないとねぇ、新一君。」

二人の予想はばっちりあたっていた。

新一は完全に快斗に嫉妬していたのである…

「あんたねぇ、嫉妬するよりも、蘭にやさしくして、蘭を黒羽君に渡したらダメ！」
園子の言葉は一生懸命応援するような声だった。
新一は「わかった」というと、コーヒーを飲みながら二人をじっと観察して何かを考えていたのであった…

「それじゃぁ、ありがとね、黒羽君。あ、おごるよ。」
蘭が席を立つ。
「いいって。おれがおごるから。じゃぁね！」
蘭は「そう…ごめん！」と言いながら店を出て行った。
三人は蘭の行動よりも快斗の行動をチェックしようと、快戸を尾行するのであった…

快斗が人気のないところに行くと
「そろそろ、尾行やめたら？名探偵たち…」

といったのであった。
三人は気づかれたと思い、新一がサッと姿を現した。
「気付かれてたか…」
といった・・・

男の対立（後書き）

えっと、長くなりそうだったので後回し。
感想待ってます！

夢の言葉

「気付かれたか…」
新一が茂みの中から快斗と顔を合わせる。
お互い、目で戦って引く暇もないような感じ。

志保も、園子も同時に茂みから出てくる。
「なぁ、蘭ちゃんから手を引けよ…」
「いやだね」
「俺はね、めちゃくちゃ蘭ちゃんを愛しちゃったんだよねぇ」
「どんなところが？」
「顔から性格まで。すべてだ」
「へぇ…俺も全部だぜ？でも、おまえが知ってる蘭と俺が知ってる蘭とでは天秤に掛けるとこっちのほうが重いぜ？しかも、俺のほうが蘭を知っている。」
冷静に言いあう男たち。

「あれぇ？どうして青子の家の前に？」

「へ？」
「あ、青子ちゃん！？」
「中森さん！？」
「青子！？」

そう、四人のいる場所は、青子の家であった。
青子は三人でいることに驚いていた。
「ねぇ、どうかしたの？」
「単なる…」
「男の争いよ。」
あきれたように言う園子と志保。
何も知らない人ならば理解不能だが、青子はわかっていた。
すべて聞いていた。
先ほどの会話、すべてを。
たまたまスーパーの帰りに聞こえた、男の声。２人いることはすぐわかっただろう。
そして、顔を見ると、快斗と新一であった。という感じ。
（蘭ちゃん争い…か）
青子はそう思って「そう、じゃぁね、また明日！」と言って家に帰っていった。
「青子ちゃん…無理してたわね。」
「えぇ、彼女にも気をつけたほうがいいわね…」
園子と志保が中森家を見上げながら言った。

そして、2人の言い合いが続いた。

「蘭は俺のもの！」
「いいや！俺のもの！」
「俺と蘭は両思いなの！」
「俺は彼女を振り向かせる！！」
「そんなの無理だね！」
「やってみなきゃ分かんねーさ！」
「そうかな？！」
「何ぃ！？」

2人の言い合いは、まだまだ続きそうだ…

そんな2人の言い合いを玄関のドアを背にして聞いている、青子がいた。

青子は快斗の言葉一つ一つが胸に突き刺さっていた。

―青子は…もういらない存在なのかな？―

―蘭ちゃんのせい…蘭ちゃんさえ来なければ…！―

―返して…快斗を返して…！返してよぉぉ！！―

青子は言葉にできないほど苦しい恋をしていた。

ふりむくことのない彼。

それでも、愛し続ける青子。

昔から好きな彼を、まだまだ愛し続ける青子。

言葉にできない思いを涙で表すことしかできない。

そのとき、ふとよみがえったのはあの、変な夢のことだった。

―青子とは単なる幼馴染だよ―

―青子？あんな奴好きじゃねーよ―

「そういえば、中森はどうなんだよ！」
「青子とは単なる幼馴染だよ。」
「本当かなぁ？好きなんだろ？」
「青子？あんな奴好きじゃねーよ。」

夢が言った言葉が・・・

現実になって行く時だった…

夢の言葉（後書き）

ちょっと、後回しにしちゃいましたぁ…！

感想待ってます！

思いを伝えて

青子は今日、工藤君を屋上に呼び出した。
放課後、夕日がきれいに見えてすごくきれいだった。

「ねぇ、蘭ちゃんのこと好きなんでしょ！？早く告白したほうがいいよ…！」
「へ？」
「蘭ちゃん、言ってたよ？工藤君のこと、好きなんだって、小さいころから好きなんだって！快斗に取られる前に…工藤君がとって、快斗の目を覚まさせて！！」
青子は一生懸命言った。
そう、これは、蘭ちゃんの運命も青子の運命もかかってるの。
工藤君で変わる…
工藤君で変わるの…
工藤君が蘭ちゃんに告白さえすれば、快斗は青子に振り向いてくれる…！

青子はそう信じて、屋上を出て行った。
屋上から出ると、そこには蘭ちゃんがいた。
前もって呼び出しておいた蘭ちゃん。
なぜか悲しそうな表情。
「どうかした？蘭ちゃん。」
「いや…ちょっと、最近新一冷たいからさ…何のことで呼び出され

たのか分からなくて…」

一応、工藤君が呼び出したってことになってるけど、工藤君は何も知らないの。

「そうやってしょんぼりしてないで！きっとＨＡＰＰＹになるよ！」

「本当？」

「うんうん！」

青子は自信を持ってた。

でも、それは違った。

確かに、初めはよかった、作戦通りだった。

でも…その後が違った…

青子はそっと、２人を見ていた。

「新一、何？話って。」

「へ？俺呼び出してね―ぜ？」

「え？でも、青子ちゃんが…」

あーあ、ちょっとすれ違ってる。

まぁいいか。

わかったと思う。工藤君のあの顔は…

（なるほど、中森がやってくれたんだな）

あ、気持ちがわかったのね！

よしよし、今すぐ告白よ！

「なぁ…蘭。」

「ん？何？」

「あ…いや…」

ったく、度胸がない…

「もーっ！男ならちゃんと言いなさいよ！！」

「へ？」

え？もしかして気づいてる！？工藤君の気持ちに！

「事件で早退した時に習った授業のノート見せてくれって！」

「は？」

はい？

全く違うんですけど…

ていうか、どんだけ鈍感！？

いや、屋上とくれば告白ってわかるだろうけど…

「あれ？違うかった？」
「あ…いや…実はそうなんだよ！」
「あーっやっぱり！？」

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい…

納得しちゃうの？

「んなわけねーだろ！？」

「へ？」

よく言った工藤君！

「…好きなんだよ…おまえしか俺の中にいねーんだよ。愛してるよ…だからその…付き合ってくれねーか？」

おお！

いいなぁ、そのセリフ。

青子も言われてみたい…！

「へ…？

へぇ〜…新一私のこと愛し……

ええええええええええええええええええええええええ！？」

蘭ちゃんが驚いて大声を上げた。

「な、なんだよ…」

顔真っ赤の工藤君と蘭ちゃん。

「本当に…？冗談でからかってるんじゃないよね？」
「あたりめーだろ？」
「じゃぁ…私も…新一のことが好きで、愛しています…！だから…私からのお願い。付き合ってください…」
「あったりめーだ！」

よく言った、蘭ちゃん！

2人とも両想い！
そして、恋人同士！

青子はパチパチと拍手をしながら2人の前に現れた。
「おめでとう、2人とも！青子、感激しちゃった！恋人同士になったんだよね？」
「あ、青子ちゃん！？今の…見てたの？」
「もちのろん！」
「ハァ…」
2人してため息をつかないでよもう…

「じゃぁ、キスしちゃえば？」
「「はあ！？」」
「青子、もう帰るから！じゃぁね！」

といって、またドアのところに隠れて2人の様子を見る青子。

「蘭…愛してるよ…」

「新一…私もだよ？」

あ…

キスした…

深い深いキス。

青子も…快斗とそんなこととしてみたい。

２人はキスをした後、

仲良く2人で帰って行った。

次の日だった。

事件が起きたのは…

思いを伝えて（後書き）

青子ちゃん、２人を見事くっつけましたぁ！
お見事！
でも、次の日、大変な事件が…！！
感想待ってます！

悪魔の降臨

「蘭！よかったね、両想いになって！」
「え？え？」
「おめでとう、工藤君。」
「おめでとー！工藤！」
「はい？」

次の日、新一と蘭が登校してくると、２人が両想いになったことを
なぜか知っていた・・・

実は…すべて青子が知らせたのであった。

まぁ、園子と志保だけに話したのに、園子がクラス中にばらまいた、
とでもいえば簡単だろう…

「快斗、おはよう！」
いつものように話しかけてみる青子。
でも、快斗は答えようとしなかった。
「快斗？」
「工藤…！」

なんと青子の予想だと、自分に振り向いてくれるはずが新一をすご
く怒っていたのであった。

青子はやばいことになったと思った瞬間だった。

快斗が新一に飛びかかったのであった。

「新一！あぶない！」

快斗の手にはカッターのような刃物を持っていた。

蘭が新一の前に立った時、

ズサッと音がした。

「蘭！！」

「蘭！」

「蘭ちゃん！」

「毛利！」

「蘭！！」

新一をかばった蘭が代わりにおなかを深く刺されたのであった。

蘭は血だらけのおなかを押さえる。

「蘭！今すぐ、保健…いや、とにかく、救急車よ！あと、先生にも連絡を！」
志保がみんなに命令する。
快斗が真っ青な顔をして蘭を見ていた。
「てめぇ…蘭になんてこと…」
新一が快斗の胸ぐらをつかみいまに殴りそうな声で言う。
「ら…蘭ちゃん…」
快斗はそれしか言えなかった。
その言葉に新一はカチンと来た。
パンッ

大きな音が教室に響く。

快斗の頬が赤くなっていた。

ぶったのは…

新一じゃなく、

園子だった。

「あんたねぇ…まず謝るのが先じゃないの…！？蘭がどれだけ痛がってるか…わからないの！？
あんたのせいで…あんたのせいで…！！」

園子は怒りに震え、もう一度殴りそうな勢い。
と、その時、
「やめて・・・もういいから…私は、平気。だからさ…もう、誰かを責めるのはやめて・・・」

苦しそうな声をして一生懸命言う蘭。
「蘭！しゃべるな…！」
「お願い…誰も…責めないで……っ」

痛い…
それだけの感情が蘭を襲う。
「蘭…もういいから…！ごめん…」
園子はそういって蘭の目の前に立って「もうちょっとで救急車来るから」と言って励ます。
新一は怒りに震えるばかりだった。
「新一…怒るだけじゃ…何も進まないよ…？」
蘭の声は震えていても…

優しい声だった。
そんな声で、新一は一旦怒りを抑え、蘭とともに救急車へ乗って行った。

病院へ着くと、蘭は手術室へと運ばれた。
「工藤君、少しは落ち着いたら？」
手術室前をうろうろと歩く新一。
「これが落ち着いてられっか・・」
「あたしだって落ち着いてなんかいられないよ、志保。」
「そうね、蘭ですものね。」

三人はそれきり黙ってしまう。
何も言うことのできない。
ただそれだけで、蘭を待ち続けていた。

「あ…！」

園子が声を出す。

手術中というランプが消えたのであった。
中から医者が出てきて
「もう大丈夫です！あとは入院して回復するのを待つだけですから…」
医者の言葉に三人はホッとして、「よかった」とつぶやいた。
「毛利さんはあと一時間後には目を覚ますでしょう。」
医者はそういって三人を後にした。
三人とも蘭のいる病室で静かに蘭の寝顔を見つめていた。

蘭は新一をかばった。

新一はすべて自分の責任と感じているようだった。
自分がもっとしっかりしていれば、こうなることはなかった。

「蘭ちゃん！」
途中で青子が病室に駆け込んだ。

「あ、青子ちゃん！」
「蘭ちゃんは？」
「今寝てるよ…！ありがとね、来てくれて。」
「青子だって蘭ちゃんの友達だもんね！」
青子はにっこり笑って病室を後にした。

でも、次に来た人に悪夢が遅いかかる。

悪魔の降臨（後書き）

次来た人って、誰なんでしょう…？

蘭ちゃん、よかった…！回復できるようになって。

感想待ってます（＾Ｏ＾）／

男の悲鳴

「…黒羽…」

新一が小さなつぶやくような低い声で言った。
ドアを後ろにして立っている快斗。
快斗を睨む園子、志保、新一。

複雑な視線が快斗に向けられ、快とはいられるような状況ではなかったが、持ち前のポーカーフェイスで焦りを隠していた。

「蘭ちゃんは？」
「手前ぇが刺したんだろ？自分で考えてみろよ。」
「そんなんじゃわからねーな」
「なら担当の先生にでも聞きな。」
「ハッ、どうしても自分たちではいえねーよう…」
「言えるわよ？」
声を出したの志保だった。
志保は冷静で相手を見下しているようだ表情で話を続けた。
「私たちにだって口はあるんだから言えるにきまってるじゃない…」
「あ、そう。で？蘭ちゃんはどうなの？」
「蘭のこと、気安くちゃん付けで呼ばないでくれる？」
「なんで？」
「あなたが傷つけたんでしょう？蘭だって嫌がるはず…まぁ、それはないとおもうけど。」
志保はいたって冷静、しかし、その冷静さが怖い…

「蘭が一番傷つくの、知ってる？」

「？」
「新一君が死んじゃったり、傷ついたり…そして、蘭のもとから姿を消すこと。つまり、黒羽君がやろうとしたことはすべて、蘭が傷つくことなんだから！！」
園子も応戦する。

「俺はな、蘭に何かあった時はな…やったやつを探偵でも殺しに行く。特に蘭が死に至った時は派手な殺し方だからな…」
「お、おい…今殺るわけねーよな？」
びくつきながら言う快斗。
震えているのが一言でわかる。
その声を聞くと志保がハッとひらめいたように
「なら、新しい実験台にでもなる？」
「いいわね、それ…」
「いいな…！」
三人が不敵な笑みを浮かべる。

快斗はその瞬間とつかまった瞬間、二階の叫びをあげた・・・

男の悲鳴（後書き）

ちょっと早い話でした…
タイムアップでしたぁ…
感想待ってます！

劇の台本

蘭が一週間後に目を覚ました。
学園祭まであと三週間弱。

蘭が目を覚ましてことを知ると、クラスメート（特に女子）が病室にどやどやと入ってきた。

病室にもともといた新一、園子、志保は驚きながらも蘭に話しかけていた。

「そういえば園子、私と新一、劇の主役よね？」
「えぇ、そうよ。」
「セリフ分かんないし、名前が…」
「あぁ、それね。」
園子が蘭の話を聞いて、かばんから二つ、「シャッフルロマンス」と書かれた本を新一と蘭に渡す。
2人はこれを一目で分かった。
劇の台本だと…
「何何…？あらすじはっと…ええ！？またこれ？」
「それの続編ってとこ。前は事件で…」
「あ、そう…」
「それに、志保がいるしね。」
「え？」
「志保は召使役、でもその召使はスパイってこと。しかし、そのスパイはいつのまにか愛してしまう…だから、そんな役ができるのは志保だけってことで決まったのよ！」
「ふ～ん…」

「まぁ、ハート姫とスペードはキスしちゃうんだけど…」
「え！？」
「いいじゃない、あんたたち恋人同士なんでしょう？」
「で、でも…ねぇ？」
蘭が新一に話を向ける。
新一も顔を真っ赤にして何も言えない状態。
2人して真っ赤な顔をしているので志保はあきれ半分に
「まぁ、工藤君のことだから本当にしちゃうわよ、きっと。だって愛しの彼女が目の前、しかも顔が近いのにしないって方がおかしいもの…ねぇ、工藤君？」
面白半分で言う志保に新一は
「わかったよ…すりゃーいいんだろ？」
と言ってしまった。
これには蘭も驚きだった。
「ちょっと、新一！お父さんが来るんだよ！？」
「いいって…」
「あんたねぇ・・・」
蘭はジト目で新一を見るがお構いなし。
そして、台本のセリフを覚えて行った。
「えっと…『スペード、一緒に遊びませんか？』
「『駄目です。またどこかで貴女の命を狙っている者がおります。』
「『そうですね…待っててください、今すぐ召使を呼んでお菓子で

も食べましょう！』
「『お待ちしておりますね。』

ここでいったん2人はハァとため息をついた。
「どうかした？」
「全部敬語なのよ…なんか、新一じゃないし。」
「蘭じゃないし。」
「ぐちぐち言わずに暗記よ！暗記！！」
園子は睨みながら言った。
「あ、次志保のセリフ。」
「はいはい。『どうかなさいましたか、姫さま。』」
「『いえ、お菓子をと思いまして…』
「『なら、少々お待ちを。』
「『はい！』

これまた一回ため息。
2人には苦労の連続であっただろう…

学園祭まで

あと三週間弱。

それまでに、

悪夢が降臨しなければ…

三週間弱…

降臨すれば…

もう少し、短くなるであろう…

劇の台本（後書き）

悪魔が降臨する時、蘭と新一の運命は？
今回、快斗と青子は登場しませんでしたぁ！
すみません（＜＿＞）
感想待ってます！

過去～約束～（前書き）

なんか、いきなり過去になっちゃったんですけど…
すみません、快斗と青子の過去を…青子視点です！

過去〜約束〜

青子は…忘れてないよ？
あの日…約束したよね？
青子は信じ続けてるよ？

快斗のこと、好きだもん

「お～い、青子！」
「なによ、快斗！」
懐かしい、小さい頃の快斗。
快斗がいつものように青子に話しかけてくる。
そんなのがいつもの生活だった。
「今日、あのきれいな桜が見える土手へ行こうぜ！」
五月。
それなのに桜が見れるなんて不思議。
でも、江古田の小さな土手の近くにある桜は今が見ごろ。それは今でもそう。

小学二年生の青子と快斗たち。
青子はその時から快斗のことが好きなの。大好きで今までずっと快斗しか見てなかった。

青子たちは放課後、土手へ行って寝ながら桜を見ていた。

きれいな桜だった。

こうやって快斗と一緒に見れたことはとてもうれしかった。
今は、ないけどね…

「きれいだな…」
「うん…とってもとってもきれい！」
「あぁ…」

青子たち二人はそのまましばらく桜を見つめていた。

小さな花びらが一枚一枚散っていく。

小さな花びらが一枚一枚旅に出る。

別れを惜しむことなくヒラリヒラリと華麗に散っていく。

そんな堂々とした花びらたちは静かに緑色に染まった地面にたどり着く。

たどり着く場所はそれぞれちがう。

決まっていなくて

その花びらの運命。

人間と同じ。

花びらもその先の運命がわからない。

そう、今のように。今のように…すれ違ってばっかり。

いつもいつも仲良しだったあの頃はもう戻らないの？

青子は…戻りたい…

いつもいつも喧嘩ばっかりして、でも、青子はその日常が楽しかった。

快斗と言い争っているのが楽しかった。

快斗の隣にいることがうれしかった。

でも、もうそんな日常はないのかな…？

青子はもう快斗の隣にいることは許されなのかな？

青子も花びらのように惜しむことなく散っていきたい…

こうやって惜しむから…苦しいんだよね…

「なぁ、青子！約束しようぜ！？」

そういえば、あの時…快斗いってた…

「何を？」

「大きくなって、そうだなぁ…うん！高校生になったらまたここに来るって！」

「え？本当！？」
「あぁ！約束な！えっと…今日の高校生、う～ん、十八歳になったらな！」
「ということは…今小学二年生だから…今八歳だから、十年後ってこと？」
「そう！」
「うん！わかった！十年後、また来よう！約束、破ったらハリセンボン入れてやるんだから！」
「はいはい、青子もな！」

快斗のこと…好きでさ…

きっと快斗忘れてるよね…

快斗…もう…青子苦しいよ…

ていうか…

今日なんだけど…

今、昼過ぎの最後の休み時間！

蘭ちゃんは確か病室！

そんなことより、五月…

ってことは、絶対的に今日なんだ…！

どう…しましょ。

青子はそう思って、快斗の机にメモを置いといた。

『快斗へ
約束の日、約束したあの土手で
青子』

放課後になると、青子は走ってあの土手へ向かった。

もし、蘭ちゃんのほうに行っているとしたら、青子はあきらめる・・・

でも、もし青子の所に来たら青子はあきらめないよ…

そして、告白する…

まぁ、たぶん来ないと思う。

でも、信じたいよ…

来てくれるって…

快斗…待ってるからね…

信じて待ってるからね…

過去～約束～（後書き）

さぁ、快斗は来るのでしょうか！？

青子、待ち続ける結果は？！

感想待ってます！

まだかえることのできない思い

午後7時。
少しずつ暗くなっていくこの時間帯。

青子はずっと土手で快斗を待っている。
しかし、一向に快斗が来る気配はない

（忘れちゃったのかな…約束）

心の中では来てくれるって信じていたはずだった。
でも、今はもう完全ではないがほとんどあきらめている。

青子は一人、花びらが散っていく様子を見ていた。

周りを見てみると、恋人同士がこの桜を見に来ていた。

2人で肩を並べて無言のまま花びらを見ていた。

たまに「きれい…」とか「すごい…」とか言っている。

青子は一緒に肩を並べてくれる人がいない。

その時、青子の携帯電話が鳴った。
「あ…はい！中森です…」

誰かから来たかどうかも確かめずにでてしまった青子は少し後悔を

しながら相手の声を聞くのを待っていた。
（誰だろ…ていうか、でないなぁ…）

きこえてくるのは
『はぁはぁはぁ…』
という声だけ。

（誰なの？これ…まさか、悪戯電話？）
青子はそう思って「切りますよ？」
といった。

それを聞いたのか相手が
「ま…待ってくれ…！！」
といったのであった。
（は？…もしかして…

詐欺師！？）

「あんたねぇ…用件はいったいなんなのよ！」
青子は半ばキレながら怒鳴るような声で言った。
しかし、電話の相手は「待ってくれ」というだけだった。
青子は仕方なく何も言わずそのまま黙ってその場で座っていた。

（誰が来るの…この場所に…
そういえば…さっきの声…誰かに…）

青子はそんなことをずっと考えているといきなり、目の前に真っ赤なバラが出てきた。

バラの先には温かそうな手があった。

（だ…誰…？）

青子はそう思って上を見上げた。

すると、そこには青子が泣きたくなるほど待っていた人がいた。

青子ときちんと目を合わせている。

「か…快斗…？」

会いたくてたまらない、快斗が青子の目の前にいたのであった。

「来てくれた…の？」

「あぁ…！約束、覚えていたよ…」

「どうして…どうしてこんなに遅かったの…？」

「母さんにお使い頼まれたんだよ…」

「へ？」

「わりーな…待たせちまって。」

「快斗…ありがとう…来てくれてありがとう…！！」

青子は思い切り快斗に抱きついた。

快斗は初め驚いていたが、ポンポンと青子の頭をなでた。

「快斗、来てくれないんじゃないかって思ってた…でも…来てくれて本当によかった…」
「おいおい、俺がそんな簡単に忘れるわけねーだろ？」
「そうかな？快斗は忘れっぽいから…」
「それはおまえだろ？」
「な、何よぉー！」
いつもの会話に戻る2人。

（こんな時間が…いつまでもいつまでも続けばいい…いつまでも…）

青子はそう思っているとそっと快斗から離れ、
「快斗…青子ね、ずっと前から快斗のこと大好き…ねぇ、もし蘭ちゃんのこと、諦めているのなら…青子と付き合って・・・青子…いつまでも待つからさ…」
「青子…」
「快斗のこと大好きだから…この気持ちはいつまでも変わらないよ…」
青子は半ば泣いていた。
（言えたけど…快との答えは違う…青子にはわかるよ…）

「悪いな…もう、遅いんだ青子…」
「…」
「俺は、まだ蘭ちゃんを忘れられない…」
「なら…どうして…どうしてここに来たのよ…」
「え？」
「どうして…どうして青子の所に来たのよ…！！蘭ちゃんのこと好きなら…蘭ちゃんのところにでも行きなさいよ！！！！！」
「でも…禁止されてるし…」
「何よ…青子、たった今快斗のこと嫌いになった！！！快斗なんかもう知らない！！」

青子はそういうなり、走って家へ向かっていった。

快斗のことで頭がいっぱいだった。
（もう…快斗は青子のことをクラスメートとしか見てないんだ…）

青子は自宅へ戻り、さっさと自室へはいてベッドに寝転がり、声を出さずに泣いた。

（遅いなら…期待させないでよ…バカ…）
何も言えることのない文句。

それだけが青子の頭の中で動き回る。
快斗の言葉、一つ一つが青子と蘭との差。

青子にはなくて、蘭にはある、この悔しさ。

それが青子をを苦しめる。

（蘭ちゃん…返してよ…快斗を返してよぉぉ！！！）

次の日、青子は学校を欠席した。

昨日のことがショックで行く勇気がなかった。

蘭はまだ入院中。

新一は蘭の付添人として休み。

（小五郎は近所の人たちと一週間の旅行で蘭がけがしたことを知らない。（というより、蘭が言わなかった））

「蘭も新一君も休みねぇ…なんか休み多いね。」

「本当ね。蘭がいないとさみしいわ。」

「あーあ、主役二人が休みはありえないよねぇ…」

「ねぇ、黒羽君、学園祭が終わったら私の家に来てくれる？前いったでしょ？実験台になるって。」

「ハッ…」

「それじゃぁ…楽しみね、その日が…」

志保は不敵な笑みをもらしながら自分の席へと戻って行った。

快斗が実験になる日は快斗が泣く日でもあるだろう…

まだかえることのできない思い（後書き）

とうとう告白した青子ちゃん！
どうなるの…！？
感想待ってます！

我慢は禁物

青子は二日連続で休んだのであった。
理由は蘭ちゃんに会うため。
走って江古田総合病院に向かう青子。
その先に待っているのは蘭ちゃん。

きっと工藤君もいるんだろうな…
2人でニコニコ笑いながら話しているんだろうなぁ…
青子も、快斗とそんな関係になってみたい…

病院に着くと、予想通り、2人でニコニコしながら話していた。
「あ…あのぉ…」
青子がそぅっとはいっていくと2人はびっくりしたように振り返っ

た。

「あ、青子ちゃん！？」

「どうしてここに…」

2人して驚いて…

可愛いなぁ…

「ううん、ちょっと、蘭ちゃんに話したいことがあってさ…ねぇ、工藤君は外してくれる？」

「え？あ、あぁ…」

工藤君は答えると病室を出て行った。

青子と蘭ちゃんの二人きり。

蘭ちゃんは相変わらずニコニコしながら青子のほうを見てくれる。

そんな笑顔に快斗はに惹かれていったんだろう…

「何かあったんでしょ？」

蘭ちゃんが青子の心を見透かしたように言った。

あ…図星…

「そんな顔してるよ…」

蘭ちゃん…

「青子ね…ふられちゃった…」

「え…？」

「快斗にね思い切って告白したらね、もう遅いんだって。」

「どういう…こと…？」

「だから…だから…」

蘭ちゃんのこと好きなんだって…！

そんなこと…

言えるはずでしょ…？

でも…口が否定をする。

いっちゃいけないって。

いったらだめだって。

できいないよね…人のプライベート情報だもんね…

「青子ちゃん…？」

青子は気がつくと目にいっぱい涙をためていた。
蘭ちゃんだって心配してる…

バカ…泣くな…

泣いたら…蘭ちゃんが悪くなっちゃうよぉ…

でも、涙は止まることはなかった。

本当のところ、つらかった。

快斗が蘭ちゃんに向ける笑顔、
言葉、
話し方。
すべてが辛かった…

そして、何より、快斗にふられちゃったこと。

お父さんがたくさん青子に話しかけてくれたけど、青子は答えたくなかった。

知られたくない…

青子は…もう無理…

限界だった。

みんなの前で泣くことは許されなかった。

だって、かっこ悪いもん…

「泣いていいよ？」

え…？

「限界なんでしょ？

泣いて大丈夫だよ…？誰も否定はしないよ…？それに、私と青子ちゃんしかいないじゃない…？」

優しい声で青子にいってくれる蘭ちゃんは天使のような人だった。

青子の気持ちがわかってくれた…

恵子だってわかってたと思うけど…でも、蘭ちゃんがわかってくれ

た…

「我慢はだめだよ？泣きたいときは泣いたら…？私だって余計な時だって泣くんだから…」

蘭ちゃんは一つ一つの言葉が温かい…

青子にはない…

でも、蘭ちゃんにはあったんだ…

「あ…う…う…っあぁ…っ」

少しずつ声を出しながら泣く青子。

蘭ちゃんはやさしいまなざしで青子を見てくれている。

「つらかったんだね…」

「たくさん泣いて平気だよ…？」

いろんなことを言ってくれる蘭ちゃん…

青子の励ましだった。

「あぁぁ…っ快斗ぉ…っ快斗ぉぉ…っ！」

気付いたら快斗って連発してた。

悔しさと哀しさがごちゃまぜになって青子には耐えられなかった。

蘭ちゃんは「そっか、そっか…」と言ってくれた。

しばらくして、青子は泣きやむとこれまでのことをすべて蘭ちゃんに話した。
蘭ちゃんは反論することなくちゃんと聞いていてくれた。

「――っというわけなの…」
「なるほど…快斗君にふられちゃったんだ…」
「うん…」
「青子ちゃんは強いんだね…」
「え？」
「私だったら一週間ぐらい泣いてるなぁ…でも、青子ちゃんは我慢して涙をこらえていたんでしょう？すごいことだよ…」
「蘭ちゃん…」
優しい声で言う蘭ちゃんはかっこよかった。
そして、天使のようだった。
「蘭ちゃん…快斗ね、やっぱり青子じゃない人が好きみたい…」
「きっと振り向いてくれるよ…アピールするんじゃなくて自然のまま青子チャンらしさを出したら？」
蘭ちゃんのアドバイスを頭の中にメモをする。

フムフム…

「なるほど…」
「青子ちゃん、きっと幸せになるよ！」
「ありがとうっ！」

元気出てきた…

もう少し、もう少し自分を磨こう…！

ありがとう…蘭ちゃん！

我慢は禁物（後書き）

蘭と青子の友情編でしたぁ！
蘭、優しいですね～！
感想待ってます！

退院…そして…

俺の名前は黒羽快斗。
蘭ちゃんのことが好きで今でも想い続けている。

でも、蘭ちゃんには彼氏ができた。
俺のライバル、工藤新一っていう奴だ…

俺はその時、工藤に怪我をさせようとした。
でも、蘭ちゃんがかばって病院に運ばれた。

そのことで、俺は罰として宮野の実験台となった……

そして、今日、蘭ちゃんが退院ということになる…

「おはよう、蘭ちゃん！」
いつものように俺の隣にいる蘭ちゃんに挨拶をした。
まぁ、返事はないと思うけど…
「おはよう、黒羽君。」
あ、かえってきた。
「お、怒ってないの？」

「そりゃ、怒ってるよ。でも、いつまでも怒ってたって始まらないじゃない。」
蘭ちゃんの優しさにひかれていく俺。
でも…

何か違う気がした。

たしかに俺は蘭ちゃんのことが好きだ。

でも、何か違う気がした…

本当に俺は蘭ちゃんのことが好きなんだろうか…？

ハハ・・・・

まさかな…

「何なら告白しちゃえば？」

へ？
蘭ちゃんではない声が左隣から聞こえてきた。
その声の主は鈴木だった。

「蘭のこと…好きなんでしょう？告白しなさいよ！」
小さな声で俺に告げる。
そうか…告白っていう手もあるんだ…

「そうだな…」

「早いわね、返事。」
「そりゃそうだ。」

乾いた声で言う俺とあきれたように言う鈴木。

そういや…青子、来てね―なぁ…

「なぁ、蘭ちゃん。青子は？」

「え…？心配してるの？」
「へ？」

なんだぁ？
目の色を変えやがったぞ…？

「心配してるのかって聞いてるの！」
そんな怖い顔をしなくたって…

そりゃ、幼馴染だから…？

「あ、いや…べべべべつに、し、心配なんて…」

「ふぅ～ん…顔、真っ赤。」
「へ？」

な、なんでおれ、青子のことで心配なんか…

ていうか…俺…何でてれてんだ？

ていうか…

俺、本当に蘭ちゃんのこと好きなのか…？

今まではそう決めつけてたけど…

なんらかで変わった。

そうだ…

青子に告白されてからだ…

俺は…本当に蘭ちゃんが好きで・・

青子のことは本当にただの幼馴染って思っていたのだろうか…？

俺の中にある、真っ白な記憶の扉が今、開けられる…

退院…そして…（後書き）

おおっ？
快斗、青子のことが・・・っ？
簡素待ってます！

過去の記憶（前書き）

出会いは原作どおりですが、その後を考えましたので変になってます。

過去の記憶

「ん？おめーも誰か待ってるのか？」
「うん…お父さんとお出かけするの…でも、お父さんお仕事で行けないかも…って」
「…」
ポンッ
「…！？」
「俺、黒羽快斗ってんだ！よろしくな！」
「…快…斗…？」
「そう！おまえは？」
「私は…中森青子！」
「へ～、じゃぁ、よろしくな！青子！」
「よろしく、快斗！」

時計前での出会い。
そう、忘れることのできない出会いだった。

でも、俺は完全に忘れてた…

小学六年生のことだった。

青子と俺はいつものように下校道を並んで歩いていた。

同級生にからかわれた毎日。

俺は、青子を特別な存在としてみていた。

なぜ、青子だけが特別な存在だったのだろう？

いまだに疑問符である。

「それでな、あいつがよー、間違って先生にバケツをかぶせちゃったんだぜ！？」
「ええーっ！？先生かわいそう…！」
「そんでな、一時間ぐらい怒られてたぜ？」
「その人もかわいそうだね…」
「まぁ、自業自得だな。」

こうやってたくさんしゃべっていたのであった。

今はもう、ない…

俺が避けてる？

いや、違う。
俺はいつの間にか蘭ちゃんに向いてしまっていた。

青子とは話さなくなった。

恥ずかしいから？
違う。
あいつとは単なる幼馴染だ…

本当にそうだろうか？

そう思っていたはずだったのに…

俺は青子をかばっていたんだろう？

「それでな、あいつ、一時間怒られた次の日もおんなじ先生にまたおんなじことやって怒られたんだぜ？」

「アハハッおバカさんだね！」

そうやって楽しんでいたはずだった…

青子が「おバカさんだね！」の「ね」を言い終わる前のことだった。

「青子！！！あぶねぇ！！！！！」

青子がこちらに振り向き、俺が青子の体を突き飛ばす。

「え…？」

青子の声が一瞬聞こえて、次には

「快斗ぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

と叫んだのであった。

キキーッというブレーキ音。

ダンッという何かがぶつかる音。

ぶつかった何かは宙に舞い、2、3メートル飛ばされ、ドサッという音を立てて地面に着いた。

俺はその時に気をほとんど失っていた。

聞こえてくるのは、青子の声だけ。
「快斗！快斗ぉ！しっかりしてよぉ、快斗ぉ！」
泣き叫ぶ青子の声。

俺は一生懸命口を動かす。
「だいじょう…ぶだ…平…気だ…けが…ないか…？」
震えていることは俺にもわかった。
青子は泣きながら俺の言葉を聞く。

あ…救急車だ…

それが聞いた途端、俺の意識はフッと失っていった。

気がついたとき、俺は病室にいた。

両親が俺を見つめていた。

母さんは今にも泣き出しそうな顔をして。

もちろん青子もいたのだった。

「青子…？」

俺はなぜか最初に青子の名前を呼んだ。

それもいまだ不明である。

「快斗！気が付いたのね！」

母さんが希望を持った声で言う。

「母さん…俺…」

「快斗、青子ちゃんをかばったんだよ…」

「え？」
「バランスを崩した青子ちゃんがトラックにひかれそうになってあんたがかばったのよ・・・」
母さんが哀しそうな目で俺を見る。
「青子を…」
「快斗…ごめん…ごめんねぇ…！」
泣いている青子に父さんが青子の肩を抑える。
俺は、青子をかばったのかと思った時、どうして命を張ってでも守りたかったのだろうか…？
単なる幼馴染だろう？
でも、その時はすごく違うかった。
こいつを何としてでも守り抜きたい。
命を捨ててでも俺は…こいつを守り抜きたかった。
こいつのことは、特別な存在以上に思っていた。
あの気持ちは何だったのだろうか…？
こいつのことを、どう思っていたのだろうか…？

今現在に戻ってみると、青子のことしか考えられなくなる。

俺の本当の心は…

青子にあったのかもしれない…

本当は

青子のことが好きなのかもしれない…

その気持ちを

俺は封印していたのか？

いや…

気付こうとしなかったんだ…

幼馴染と決めつけていたから…

過去の記憶（後書き）

快斗君、やっと気持ちに気づいてくれましたね！
本当によかったです！
リクエスト、ありがとうございました！
感想お待ちしております！

本当の心はここに…

俺は、過去も記憶をたどって気付いた。
本当の俺の心は、どこにあったのだろうか…？

それは、青子の中だった。

いや、青子の中ではない、心だけが青子を見ていた。

それに俺は気づこうとしなかった。

幼馴染と決めつけていたから…

でも、なぜ蘭ちゃんのことが好きと思ったのだろうか？

なぜだろう？

性格？

顔？

スタイル？

俺は、何をどう考えれば蘭ちゃんのことを好きになったんだろうか？

そう思って今日、工藤に会いに行こうと思った。

どうせ、ブッとした顔で迎えるはずさ。

ピンポーン、ピンポーン。

何回押しただろうか…

計２５回。

いや、それよりも・・・

「ゴラァ！！何回鳴らしてんだ、バーロォ！！」

と怒鳴ったほうが音は大きかった。

「んあ？黒羽か…何の用だ？」

ほら、ブッとした顔。

俺の予想通り♪

それよりも…本題へと切り出さなくちゃな…

「いやさ、どうして俺、蘭ちゃんのこと好きになったのかなぁって…」

「はぁ？」

「俺さ…気づいたんだよ…俺の心は青子を見ていたって。」

「はぁ？」

「だから、青子のことが……好き…ってことが…」

「はあ！？」

何でそんなに驚くんだよ…

「お前言ったじゃねーか！中森のこと単なる幼馴染だって！」
まぁ、そうくるわな。
「いやだからな…青子のことを幼馴染だと決めつけていたから好きと気づこうとしなかったんだ…」
顔が赤いのは自分でもわかった。
でも、今頼れるのは工藤だけだと思っていた。
だからこそ、俺の思っていることをすべてはいた。
工藤ならわかってくれると思うからな…
「ふぅん…それで、どうして中森のことが好きなのに蘭のことが好きになったのかがわからないんだな…？」
「そう…いうこと。」

「ハハーン…」
「な、なんだよ…」

「おまえは蘭のことを中森と勘違いしてたんじゃねーのか？」
「は？」
「蘭と中森を重ね合わせてたんじゃねーのか？」
「フム…」
一理ある。
そうかもしれない。
本当は、青子と蘭ちゃんを重ね合わせていたのかもしれない。
蘭ちゃんへ対する思いは本当は青子に対する思いだったのかもしれない…。

「さすが工藤！！ありがとな！」
「まぁな…」
「じゃぁ、青子に告白…したほうがいいのか？」
「そうだな、男からするもんだろ…そのほうがかっこいいしな。」
「あ…実はな、初め青子に告白されたんだ…」
「はぁ！？」
「俺は、その時青子への気持ちに気づいてなかった…だから、ふっちまったんだ。」
「かわいそうに。」
「だから俺、今度は俺青子に告白する！」
「そうだな、まぁ、頑張れ。」

ったく、相変わらず、感情のない奴だ。
ま、俺に対してだけだろうけど。
蘭ちゃんにベタ惚れのくせしてねぇ…
「蘭ちゃんにもよろしくな、蘭ちゃんしか見てね―、推理オタク野郎さん！」
「テメッそれ、誰から聞いた！？」

「蘭ちゃんだよ！」
「ニャロォ…」
悔しがる工藤に俺はこいつとはいい関係になりそうだと思った。
こいつとなんか似てるような気がして…

次の日、俺は青子を放課後呼び出した。

青子は屋上にくると、あんまり俺の顔を見ずにうつむいているだけだった。

今日、久しぶりに学校に来た青子。

俺はこの日を待ちかまえていた。

「青子…俺さ…」

「いいよ、快斗。快斗は蘭ちゃんが好きなんでしょう？だったら、青子なんかといないで、蘭ちゃんといなよ…」

「違うんだ青子！」

「え…？」

驚いた様子の青子が愛しい。

そう、俺は、青子の何から何まで好きだった。

それに気づかなかった自分が悔しくてたまらなかった。

「俺は、青子のことが…

ずっと、ずっと前から好きだった。

でも、それに気づかずに生きてきたんだ…でも、やっとわかったんだ…

おまえのこと、

愛していたって…」

「へ…？

愛して…た・・・？」

「あぁ…」

「本…当に…？」

「もちろんだ…」

青子を自分のものにしたい…

それだけが、俺の願いだった…

「快斗…青子も好きです・・・・」

「それは知ってるさ…」

「うん…うん…」

かわいらしい青子(きみ)…。

愛しい青子(きみ)…。

それに気づいた俺は、これでやっとすっきりした。

今までの違和感もなくなっていった。

俺達で築き上げたい。

これからの人生を…。

「青子、愛してるよ…」

無理矢理だったけど、長いキスをした。

俺も青子も幸せになれればいい。

そうしたら俺達にも幸せが生まれてくる。

それを教えてくれたのは、

鈴木、宮野、工藤、そして蘭ちゃんだった。

蘭ちゃんがすべて教えてくれたんだ。

言葉では言わなくても心の中では思っていたはずだ、蘭ちゃんはね。

鈴木だって、宮野だってそれなりのことをしてくれたと思う。

最後にとどめを刺して工藤。

工藤には感謝してるさ…

あ……

忘れてた…

あと、一週間で俺は宮野の実験台にされるんだった…

地獄まで、あと一週間しかないのかよ…

それは、俺にとって最悪な日にでもなるだろうな…

本当の心はここに…（後書き）

もうすぐ最終回です！！

学園祭～劇の練習～（前書き）

学園祭まであと一週間。
なんと、快斗の役とは…！？

学園祭～劇の練習～

「それじゃぁ、劇の練習するよぉ！」
気の入った園子の言葉に、新一と蘭以外の人は「オーッ」といったのであった。
「おやおやぁ…？主役のお二人がやる気ありませんなぁ…？」
園子はニヤニヤしながら2人に言う。
2人はハァとため息をつきながら
「オー…」
といっただけだった。
「もっと気合入れて！」
「…オーッ！！」
みんなやりも大きな声で言った2人に、園子はまたしてもニヤニヤして
「そのまま誓いにキスでもしちゃえば？」
「園子！！！」
「お前なぁ！！」
2人は真っ赤な顔をして園子に怒鳴る。
園子は「はいはい、いいってば…」
と渋々承知した。
どうやら、本気でやってほしいとでも思ったのだろう。

「じゃぁ、主役二人！舞台に上がって！！」
監督の園子（召使役もある）が2人に命令をする。
2人はまたしても渋々と「はぁい…」と言いながら上がって行った。

「じゃぁねぇ、ハート姫のお屋敷で2人が遊んでいる様子のシーンよ！
――はい、どうぞ！」
園子の合図とともにほかの役のクラスメートも（特に女子は召使のため）役を演じた。
『姫様、スペード様がいらっしゃいました。』
志保が召使として蘭、ハート姫に近づきながら言った。
『まぁ、もう来たのですね！今すぐ迎えに行かなくてはいけませんね！』
ハート姫は嬉しそうに黒衣をまとったスペードが玄関の前でハート姫を待っていた。
『スペード！』
『ハート姫！』

『よく来てくださいました！お父様が久しぶりのスペードに会いたいと申したのです。お先にお父様のほうへ行ってくださいますか？』
『わかりました。』
スペードはそういうと召使（志保）の案内によってハート姫の父に面会に行った。
『失礼いたします。』
『うむ…スペード君かね？』
『はい。』
『ハートが会いたがっておった。』
父はなんと快斗であった。
快斗は変装の名人、それを見込んでクラス皆が決めた。
『私も会いたかったです。』
『そうか…大きくなったな。ハートのことをよろしく頼むぞ？』
『はい…どうか、なさいましたか？』
『もうすぐ寿命での…』

『そんな…っ』
『仕方ないものなのだ。ハートを生んだのは私や妻が年をとってからだからのう。』
苦しそうな声に完全に演じきっているということが分かる。
『ハート姫はどちらに？』
『多分庭じゃよ。ハートは外が好きだからのう。』
遠くを見るような眼に新一、いや黒衣の騎士は『わかりました』といった。
『いってくれ。ハートの笑顔が見たい。君にしか、ハートは本当の笑顔は見せないからな…ここから見える。君に見せている笑顔がのう…』
優しい声が体育館に響く。
『わかりました…』
スペードはそういうと、ハート姫のもとへと向かった。

ハート姫は庭によく来る、小鳥を手に取り優しい目で小鳥を見つめていた。
スペードが来るのが見えると
『スペード、一緒に遊びませんか？』
といった。
『駄目です。またどこかで貴女の命を狙っている者がおります。』
『そうですね…待っててください、今すぐ召使を呼んでお菓子でも食べましょう！』

『お待ちしておりますね』
ハート姫がキッチンへ向かうとそこには召使（志保）がいた。
『どうかなさいましたか、姫さま。』
『いえ、お菓子をと思いまして…』
『なら、少々お待ちを。』
『はい！』

そこで練習は終わった。

「蘭、こういって。『スペードぉ、一緒に遊びましょうよぉ～！』って！」
「へ？そんなの台本には…」
「いや、やっぱいいわ。蘭はそういうタイプじゃないわね。」
「？」

そうやってあれこれ時は過ぎていき…・

学園祭が明日へとなって行った…

同時に快斗への罰ゲームが明後日となって行った…

学園祭～劇の練習～（後書き）

いやぁ～・・・
もうすぐもうすぐ最終回です！！
快斗の役はハート姫のお父さんでしたぁ！
感想待ってます！！

学園祭～当日～（前書き）

劇の最後のほうだけ書きますね…全部書くと長くなってしまうので…
すみません＞＜

学園祭～当日～

『黒衣の騎士よ、あなたはハート姫のことを愛しているの？』
『もちろんです。逆に私があなたに質問をいたします。あなたはどうして他の国のスパイなのに、その国を裏切り、私とハート姫を守ってくださったのですか？』

「シャッフル・ロマンス」でハート姫の召使が本当はハート姫の命を狙う奴らのスパイだと知ったスペードは、スパイを懲らしめおうと、スパイのいる村に向かっている途中、ハート姫の命を狙う奴らに襲われたのであった。
スペードは1人で戦っているのだったが、その途中、スパイが奴らを裏切り奴らをともに倒したのであった。
そして、村へ無事に着くとスパイが念を押すように「ハート姫のことを愛しているのか？」と聞くのであった。

『…私があなたを愛してしまっただけよ。あなたを見ているうちに愛するようになってしまっただけ。
ただ…それだけのことよ…私のこと、許されないと思うわ。私は今から滝へ向かい、命を天に授け、あなたを待っているわ。あなたと二人きりになることを…』
『やめろ！命を無駄にしてはいけない！！たとえ許されなくてもあなたが命を天に授けることは許されないのだ！』
『許して…くれるの…？』
『あなたは何もしていない…』
『あぁ、もしあなたが私のことを愛してくれるのなら、ここで誓いの口づけをしたいところ…』
『それはできない。私が愛したのはハート姫だけだ…』
『私はとても幸せ…あなたに許されることがとても幸せよ？』

『それはどうも…。』
『なら、私はこれで失礼するわね。この村にハート姫を呼んだから。』
『ハート姫…！』
向こうに見えるハート姫にスペードは嬉しそうな声を上げる。
『スペード！今までどこにいたのです！？』
『君のことについて彼女に聞いていたのだ…』
『召使の…』
『姫様、ご幸せに…』
『ありがとう…どうもありがとう…！』
嬉しそうなハート姫に一同は笑いがこぼれる。
『私は、このことを決して忘れませんわ。』
『私もだ。』
『この召使もでございます。』
『召使、どちらへ？』
『滝を見てくるのでございます。』
『いってはならん！』
『スペード…？』
『スペードさま…』
『私は信じているぞ…？』
『私もですよ？』
『スペードさま…ハート姫様…ありがとうございます…』
こうして、２人は幸せになったのであった。

『これで、シャッフル・ロマンスを終わりにいたします。』

アナウンスが流れると、客たちは次々に帰って行った。

さて、蘭たちは舞台裏で何をしているのだろうか？

蘭と青子と園子と志保は次にメイドのコスプレでカフェをやるのであったがまだかかっているのだろうか？

「ちょっとぉ！いまさら駄目なんて遅いわよ！！！」
「絶対反対だ！！！」
「そんなのあなたが決めることじゃないじゃない！！！！！」
「絶対的に反対だ！！園子、いい加減にしろ！！」
「いい加減にするのは新一君！あなたでしょ！？」
「おまえだ！」
「いいえ、新一君！！」
「何ぃ～～！！！！！」

「なんですってぇぇ〜〜！？」
２人の言い合いが舞台裏で繰り広げられている。
聞いての通り、園子と新一の言い合いであった。

なぜ、言い合いになっているのだというと…

「園子、これでいいの？」
蘭がメイド服を着て園子と新一の目の前に現れたのが原因だった。

「は？何で蘭がそんな服…！？まさか…園子、てめぇぇ…！！！」
「何そんなに怒ってるのよ、可愛いじゃない！男子が見たいってうるさいのよ！特に蘭と志保のメイド服姿をね！」
「蘭がやるのは反対だ！」
「どーしてよぉ！いまさら反対されても困るんだけどーっ！」

というのであった。

「あのぉ、そろそろいってもいい？男子達が…」
蘭がちらっと外を見ると、男子のブーイングの嵐。
「はやくしてくれよーっ！蘭ちゃんのメイド服姿ーっ」
「志保ちゃんのメイド服〜！」
「俺達早く見てーよ！」

「あ、そう、いってらっしゃい、蘭、志保、青子ちゃん！」
「あ、ら…うぐ…っ」
園子がハンカチに仕込ませておいたクロロホルムで新一は静かに眠りについた。
鈴木財閥の力を借り、新一を園子の家の倉庫に置いておいた。

学校では蘭や志保、青子のメイド服で男子達はワーワー騒いだいたのであった。

「園子ぉ～！もうこっち完売！新しいの作らなきゃぁ！」
「ＯＫ！蘭、手伝って！」
「はいは～い！」
蘭が行こうとすると男子達のブーイングのあらし。
しかし、蘭はさっさと行ってしまった。
「ねぇ、園子。何であんなに騒いでるのかなぁ…？」
「はぁ？」
「私が行くとワーワーうるさくなるの。もしかして嫌われてるのかなぁ…？」
「その逆よ、蘭。」
「え？」
「蘭が好きなのよ、あの男子達は。」
「まさかぁ、あの中に新一よりもイケメンの中村君だっているのよ？ありえないよ。」
「あんたねぇ、その中村君も蘭のことが好きなのよ！」
「何言ってるのよ、園子！こんなブスに中村君が好きになると思うの？」
「蘭、あんたねぇ…」
ここまで鈍感だと園子もあきれてくる。

蘭はそんなこと想わずにせっせと料理を作り始めた。

「おやぁ？蘭、なんだか新一君ようの料理を作っているようですが…？」

「え？あはは、いつもの癖だ…」

「その料理、もってっちゃえ！」

「ちょ、駄目よ！」

「はいはい、あんたはルールを破りたがらないのね。」

「園子ってば…」

2人はそんなこんなで料理を作ってみんなの前に運んで行った。

学園祭が終わるとみんなはワイワイ騒ぎながら家に帰って行った。

「そういえば、新一は？」

「あぁ、新一君なら…」

「園子ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！」

大きな怒鳴り声で園子を呼ぶ新一が走って2人の目の前に現れた。
「し、新一！？」
「ゲッ…もう目を覚ましたの！？」
「ったりめーだ！蘭、まさか、メイド服…」
「着たけど…」
「蘭、いろいろと騒がれたか？」
「うん、うるさいほど。」
「園子ぉ…！！！！！」
「あ、だからね、そのね…あ、アハハハハハ…」
ごまかすように笑う園子、そして、新一から逃げるため走った。
新一はネズミを見つけた猫のように園子を追いかけた。
その様子は蘭が一番好きな光景であった…

学園祭～当日～（後書き）

次、最終回です！！感想待ってます！

願いを込めて

「さぁ、黒羽君、実験の始まりよ。」
志保が快斗を機械で作ったような椅子に座らせ、快斗の頭にこれまた機械で作ったヘルメットをかぶせ赤いボタンを押す。

「もしかしたら、結構痛いかもだから覚悟はありね。」
「なぁ、死んじゃうことは…？」
「まれにあるかもね、まれに。まぁ、それはあなたの運次第。自分では決めることのできない運命（ルーレット）。でもだいたい、１２％の確率で死に至るってところかしら？」
「へ、へー…」
快斗は少しおびえがながらも志保がボタンを押すのをじっと待っていた。
すぐそばには青子がいる。
自分の彼女の目の前で弱みを見せたらさぞ悔しいだろうか？
きっとそれを期待して志保は青子を呼んだのであろう…
「それと…この実験は何のため？」
今度は青子が質問する。
「あぁ、どのくらいの速さでこの機械が動くか…つまり、この機械は人間を気絶、または気を失うことのできる機械。それで、どのくらいの速さで気絶するのかがわからなかったから…」
「それ、使い道は…？」
「これを小さめにしてスタンガンのようにビリッと来るようなものではなく、なにも感じない速さで気絶させるっていう自分を守る機械を発明したかったの。」
「え？何何？ストーカーでも…？」
「いいえ、単なる罰ゲームってところかしら。」
「ば、罰ゲーム？」

「そう、いろいろと使い道はあるんだから。」
「へ―…」
青子は感心しながらもヘルメットといすをジーとみていた。
「それじゃぁ、行くわよ?」
志保がカチッと音のするボタンを押すと快斗は「ウギャッ」という声を立てて一瞬にしてダランと倒れた。
「快斗!」
青子が何かあったのではないかと快斗に駆け寄る。
「宮野さん!快斗が…快斗が…」
「あらあら、痛みを感じちゃったみたいね。」
「宮野さん!」
「平気よ。彼は死んでない。」
「でも…」
「明日になれば目が覚めるわ。それじゃぁ、わたし、研究室にいるわね。」
「ちょっ、宮野さん!!」
志保は青子の言葉を気にも留めずに地下へと向かう階段を降りて行った。
青子は倒れている快斗をじっと見つめて次の日がたつのを待っていた。

次の日―

青子は寝ずにずっと快斗を見続けていた。
コクンコクンと顔が上がったり下がったり。
それを見て志保が、
「ちょ、ちょっと！あなた寝てないの！？」
「あ…宮野さん…？」
「早く寝なさい！」
「でも…快斗が…」
「平気よ！とにかく今はあなたが優先！ソファーで横になってなさい！」
志保が青子を抑えながらソファーへと誘導させると一瞬にして青子は眠りについてしまった。
そんな無邪気さが蘭に似ていると志保は改めて思う。

「ホント、我慢強くて泣き虫で芯が強い、いいとこ取りじゃない…」
さびしそうでもうらやましそうな顔をする志保。

「そんな顔、するんだな…」

その声に振り返ると倒れていたはずの快斗がむくっと起き上がった。
「あら、起きてたの…？」
「あぁ、ついさっき。」
「ふぅん…」
「お前、いつもそんな顔してりゃーいいのによ…」
「あら、私の今の顔が気に入らないっていうの？」
「んなこと言ってねー。」
「あらそう。」
志保はそっけない返事をするが…

（ホント、工藤君にそっくり。あなたが言ったセリフ、前にも言われたわ。工藤君（彼）にね。なんだか温まった気がしてた…そう、一時的に彼を愛していたのかもしれない。でも、蘭がいた。だからすぐあきらめた。というよりも、自分の気持ちを押し殺したのね…だから今は何とも思っていない。そうでしょう？工藤君。）
と心の中で思っていたのであった。

一時的に新一を愛した志保。
今でも愛し続ける新一と蘭。
同じく同様に快斗と青子。
愛し続けさせた協力者の園子。

そうやってこれらは歴史を積み重ねていった。

二十年後―

新一と蘭、園子、志保、快斗、青子ともに３７歳。

新一と蘭の子供、コナン、愛梨、快斗と青子の子供、空、平次と和葉の子供（本作品には登場してませんが…）、玲次ともに１６歳。

「愛梨、あそこいかへんか？」
「いいね！行こうよ！」
「空、あっち行こうぜ！」
「うん！行こう！」

気持ちの良い空の下で四人の高校一年生の男女がラブラブで公園で遊んでいる。
それをこっそり見ている、園子と志保。

「あの子たち、絶対結婚するわね。」
「そりゃ、そうよ！でもさー、しちゃったら蘭たちの関係、全部一筋になっちゃうわね。」
「そうみたいね。ごちゃごちゃな関係だけど。」
「ハハハハハハハ…」
乾いた声で笑う園子だが、結構期待している。

そのまた十年後、

あの四人の子供たちは、園子と志保が言った通りに結婚することになる。

もちろん、コナンと空、愛梨と玲次。

そして、それぞれの子供たちがほかの人を好きになり、そのほかの人と結婚し、また子供が生まれていく…

そうして、命が渡って行くのである。

願いよ…

もし、かなえてくれるのなら、

すべての人を幸せにしたい…

でも、それは叶うわけにはいかない…

その答えとは…

いつか分かるもの。

人々は必ず幸せと思う。

自分の命を引き継いでくれる人がいるのであるから…

「願いを込めなくちゃだね…新一…」

「あぁ、コナンと愛梨にな…」
「えぇ、私たちの天使にね。」

「「天使へと願いを込めて…」」

そうして、命は引き継がれてゆくのである…

fin.

願いを込めて（後書き）

はい、最後、ちょっとあっけなかったですね！
実は、志保の実験なんですが、結構役に立ったみたいなんですよ！

志保「えぇ、あのおかげで犯人逮捕できたって高木刑事から連絡があったわ。」
鈴蘭「よかったよかった！」
志保「まぁ、私的には必要なかったけど。」
鈴蘭「あ、そう」
志保「結構冷めてるじゃない。」
鈴蘭「あなたに言われたくないような気がする…」
志保「次の作品できてるんでしょうね？（スルー…）」
鈴蘭「ん、まぁ、一応考えてるよ。」
志保「どんなもの？」
鈴蘭「オリジナルにしようかって迷って・・・」
志保「やめといたほうがいいわ。」
鈴蘭「どーして？」
志保「忠告しただけ。」
鈴蘭「あ、そう。」
志保「やっぱり冷めてるわよ。」
鈴蘭「それじゃぁ、感想待ってます！！」
志保「（完全な無視ね。罰ゲームにしないと…）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1162ba/

願いよ…

2012年1月10日20時52分発行